

憲法と映画(118)『ヒトラーの毒見役』

独 123 分

<かな>



「毒見役」と聞くと、江戸時代に遡って食事に毒が入っていないか事前に安全を確認する役職で、問題がないことを確認して初めて食事を殿様にお出しするという話なら頷けます。しかしこの映画の題名は『ヒトラーの毒見役』です。つまり今から80年余り前の独裁国家ナチス・ドイツにも毒見役が存在していたということです。この映画は、ドイツ人女性マルゴット・ベルクの証言に基づいて執筆された世界的ベストセラー小説「ヒトラーの毒見役」を原作に作られました。実話に基づくものです。映画では、事前に健康チェックを受け無作為に選ばれて合格した若い女性7人が毒見役に選ばれるという設定です。

時は1943年、毒見役に選ばれたのは、“狼の巣”と呼ばれたヒトラーの総統大本営がある森の近くにたまたま住んでいた女性たちです。若い男性は、主人公ローザの夫も含めて兵隊として前線に駆り出される存在であり、女性は毒に当たって死んでもかまわないという軽い立場だったからでしょう。一日三食、7名は同じテーブルに向かい合って座り、銃を携帯した親衛隊の監視のもとでヒトラーお抱えの料理長の作った食事を事前に食べて毒見をするというものです。夕食後 1 時間が過ぎて何事もなければ自宅に帰れますが、戦況が悪化すると泊まり込みでの試食に変わります。最初は普段口にできない美味しい食事に喜びを隠せない7名ですが、残すことも一度口にした食べ物は吐き出すことも許されません。日が経つにつれて死と隣り合わせの試食に恐怖を憶えていきます。ある日ついに事件が起きます。デザートを食べた3名が苦しみだして吐瀉物と共に床に倒れてしまいます。幸い命は取り留めますが、まさにサスペンス映画のようです。

1944 年 7 月、総統大本営でヒトラー暗殺を狙うクーデターが起こり、戦局は混乱を極めていきます。彼女たちの情報源はドイツ国営のラジオ放送のみですが、ヒトラーを狙って連合軍が攻めてくるのではないかと、空爆がありここにいること自体が危険ではないかと不安は募るばかりです。

映画界では、戦後81年経ってもナチス・ドイツやヒトラーを描いた作品は後を絶ちません。ドイツに限らず、ナチスがらみの作品でジェノサイドや非人間性を告発し続けている反面、日本では戦争「被害」は取り上げられても加害面はお寒い限りと言っても過言ではありません。